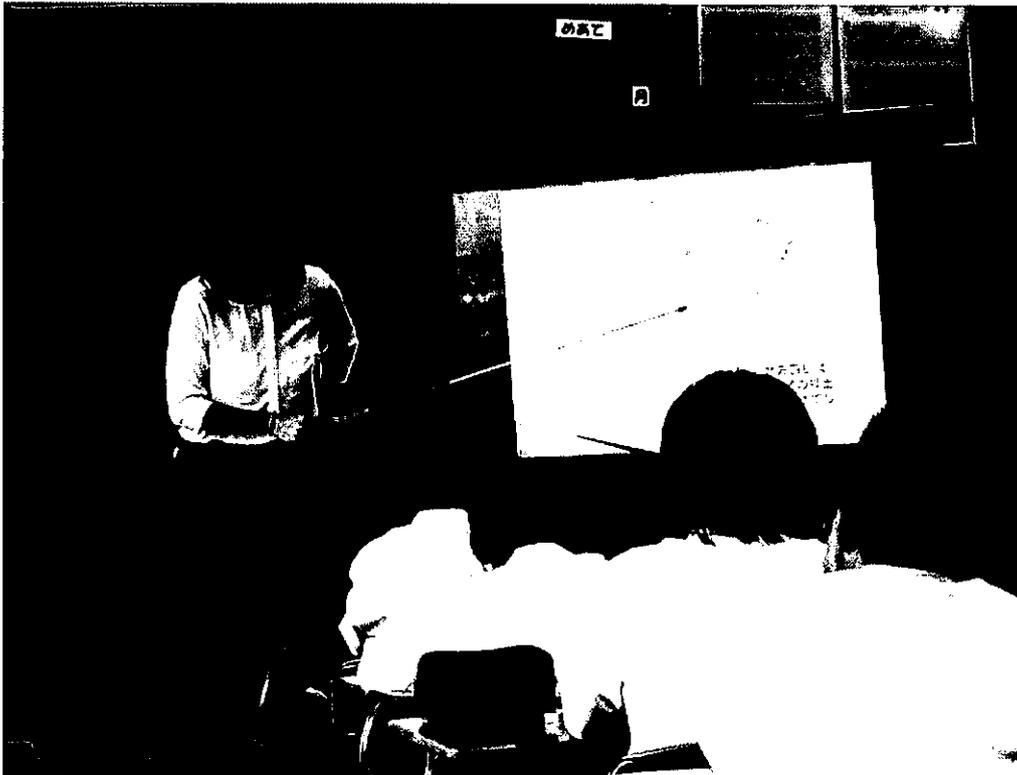


第 12 回
「北方領土と私たち」作文コンクール
入賞作文集



(実践推進指定校公開授業 南丹市立園部中学校)

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

目次

1	発刊にあたって	1
2	実施要項	2
3	入賞作文の選考について	3
4	入賞者一覧	4
5	授賞式風景	6
6	歴代最優秀賞受賞者一覧	7
7	京都府北方領土教育者会議について	8
8	入賞作文	9

○最優秀賞

京都府知事賞	南丹市立園部中学校	藤内空菜
京都市長賞	京都市立嵯峨中学校	宇佐美智也

○優秀賞

京都府教育委員会教育長賞	京都府立洛北高等学校 附属中学校	塚田真菜望
京都市教育長賞	京都市立北野中学校	村瀬歩実
北方領土問題対策協会理事長賞	京都府立園部高等学校	高橋怜奈
北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立嵯峨中学校	川島花菜
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京丹波町立和知中学校	梅原侑理沙
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立桂川中学校	漆垣皓大
京都新聞賞	南丹市立園部中学校	西山満琉
京都新聞賞	京都市立栗陵中学校	深尾まりん
KBS京都賞	綾部市立八田中学校	山内颯太
KBS京都賞	京都市立桂川中学校	竹中裕貴

○佳作

佳作	京都市立嵯峨中学校	山田大翔
佳作	京都市立中京中学校	工藤佳那
佳作	京都市立烏丸中学校	谷井亜斗夢
佳作	京都市立嵯峨中学校	松山瑚春
佳作	京都市立北野中学校	森文音
佳作	南丹市立八木中学校	中西陸駆
佳作	京丹波町立瑞穂中学校	小原彩芽
佳作	与謝野町立加悦中学校	森本真依
佳作	京都府立園部高等学校 附属中学校	平井穂乃香
佳作	京都府立福知山高等学校 附属中学校	植村結友

発刊にあたって

「北方領土と私たち」作文コンクールも、今回で十二回目を迎えることができました。ここまで回を重ねてこられましたのも、関係の皆様のご理解と御協力のたまものと、心から厚くお礼申し上げます。

さて、近年東アジアの情勢は緊迫の度を増しており、外交関係は予断を許さない状況にあります。しかし、北方領土問題についていえば、一昨年の安倍首相とプーチン大統領の会談を受けて、昨年六月からロシアとの共同経済活動に向けた現地調査が始まり、また、九月には航空機による元島民の方々の墓参が実現しました。プーチン大統領の思惑はつかみきれないところがあり、今後の成り行きも不透明なところはありますが、日露両国が良好な外交関係を継続させることは、北方領土返還をめざす我が国にとって極めて重要であります。

一方で、私たち国民はこの問題について、まず自分に関わることをして関心を持ち、自分に何ができるか考えることが必要です。個人が直接、国際政治に立ち入ることはできませんが、正しい知識と返還に対する強い意志を持つこと、そしてこの事を同心円的に周囲に広げていくことが、結果として、国民の世論を形成し政府を後押しすることにつながるのではないのでしょうか。

そして、そのことを力強く発信してくれるのが、次代を担う若者であり、その意味においても、この「北方領土と私たち」作文コンクールには大きな意味があると考えます。

京都府知事賞を受賞した藤内空菜さんは「これから出会う多くの人と一緒に、日本とロシアの問題を解決するため、「絆」と「信頼」を深めていく取組を進める一人になつていきたいです。」と力強く決意の言葉を述べていますし、京都市長賞の宇佐美智也さんは「最初は、身近な人

と少し話をしてみるだけでも良い。これを繰り返す中で、多くの人と交わり、考えを交換することを通して、早期解決と平和的な解決へ結び付けていけるのではないだろうか。」と述べ、周りへ広げていくことの重要性を訴えています。他にも、この冊子に掲載されているように多くの中学生・高校生たちが前向きな主張をしており、その輪がさらに広がれば、これほど心強いことはありません。

ところで冒頭で述べましたように、この作文コンクールは第十二回を迎え、一定府内の各中学校、高等学校にその趣旨が浸透したとは思いますが、世論形成の原動力となる若い世代の関心や理解を一層拡充するためには、府民会議と教育者会議の連携がより重要となってきました。ぜひ関係の皆様には、周りの教育関係の方々や生徒たちに作文コンクールへの応募について、幅広い呼びかけや働きかけをお願いしたいと存じますので、御理解、御支援をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

結びにあたり、応募していただいた生徒の皆さんや御指導いただいた各校の先生方に感謝申し上げますとともに、御後援いただきました京都府、京都市、京都府・京都市教育委員会、京都府・京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会、京都市町村教育委員会連合会、京都府私立中等高等学校連合会、独立行政法人北方領土問題対策協会、京都新聞、産経新聞京都総局、KBS京都の皆様をはじめ、関係の皆様にも厚くお礼申し上げます、発刊の言葉とさせていただきます。

平成三十年二月三日

北方領土返還要求京都府民会議
会長 村田正治
京都府北方領土教育者会議
会長 小森誠

平成29年度 第12回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

- 1 趣 旨 京都の中学生や高校生が、北方四島の現実に関心を高め、北方四島が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土に対する関心を高めることを目的としてこの事業を実施する。
- 2 主 催 北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議
- 3 後 援 京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会
京都府中学校長会・京都市中学校長会・京都府公立高等学校長会
京都府市町村教育委員会連合会・京都府私立中学高等学校連合会
(独立行政法人)北方領土問題対策協会・京都新聞・産経新聞京都総局
KBS京都
- 4 テーマ 「北方領土と私たち」にかかわる内容であること(題名は自由)
- 5 募 集 (1) 対 象 京都府内の中学校・高等学校に在学している者
(2) 募集締切 平成29年12月8日(金)
(3) 作品規定 原稿用紙(400字詰)3枚程度
(4) 応募先 京都府北方領土教育者会議事務局
〒629-1116 京都府船井郡京丹波町市場丸ヶ野4
京丹波町立和知中学校 乾宛 TEL 0771-84-1104
- 6 審 査 主催者において選定した審査員により審査
- 7 表 彰 (1) 賞の設定
最優秀賞 2点・京都府知事賞・京都市長賞 各1点
優 秀 賞 10点・京都府教育委員会教育長賞 1点
・京都市教育長賞 1点
・北方領土問題対策協会理事長賞 2点
・北方領土返還要求京都府民会議会長賞 2点
・京都新聞賞 2点
・KBS京都賞 2点
入選・佳作 若干点
(2) 表彰式
平成30年2月上旬
(北方領土返還要求京都府民大会会場にて表彰予定)
- 8 その他 ・応募の際は別紙の応募一覧表を添えて下さい。

問い合わせ先	京都府北方領土教育者会議事務局 (京丹波町立和知中学校 乾 和広)
	0771-84-1104

入賞作文の選考について

1 応募の状況

応募校	24校	応募点数	1,448点
-----	-----	------	--------

2 選考委員と選考基準

(1) 選考委員会の構成

氏名	役職・所属等
小森 誠	京都府北方領土教育者会議会長 (京丹波町立和知中学校校長)
宮田 功	京都府北方領土教育者会議副会長 (京都市教育委員会学校指導課首席指導主事)
杉村 朗	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市立松原中学校教頭)
森 茂 昭	京都市総合教育センター指導主事
石田 誠	京都市立北野中学校教諭
松島 功一	京都市立嵯峨中学校教諭
松本 和久	京都府北方領土教育者会議顧問 (京丹波町教育委員会教育長)
西田 三郎	京都府北方領土教育者会議顧問 (京丹波町教育委員会参与)
島本 由紀	京都府北方領土教育者会議顧問 (京都市教育委員会学校指導課参与)
中西 和之	北方領土返還要求京都府民会議副会長
野村 啓介	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
山本 哲也	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
土 淵 誠	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長

(2) 選考基準

- ・ 北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
(正しい認識・理解の視点)
- ・ 北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
(主体的な態度・関心・意欲の視点)
- ・ 北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、取り組もうとしているか。
(将来への展望の視点)
- ・ 上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
(啓発資料としての価値の視点)

3 選考の結果

- ・ 別紙の入賞者一覧のとおり

4 選考を終えて

- ・ このコンクールも12回目を迎え、府内の中学校・高等学校にもかなり浸透してきたが、今後さらに多くの学校が応募できるような取組を進めたい。
- ・ 作文の内容をみると、最近の社会情勢を念頭に置きつつ、社会科の授業内容を深化させ、国民の関心を高めること、交流を進めることの大切さに加えて、思いやりの心で絆を強めることが平和的解決の糸口となるという、「人と人のつながり」に視点を当てた作文が見られたことが注目される。

第12回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

応募校数：24校　応募作品数：1,448点

氏　　名	学　　校　　名	学　　年
最優秀賞（京都府知事賞）		
藤　内　空　菜	南丹市立園部中学校	1年
最優秀賞（京都市長賞）		
宇　佐　美　智　也	京都市立嵯峨中学校	3年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
塚　田　真　菜　望	京都府立洛北高等学校附属中学校	2年
優秀賞（京都市教育長賞）		
村　瀬　歩　実	京都市立北野中学校	1年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
高　橋　怜　奈	京都府立園部高等学校	1年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
川　島　花　菜	京都市立嵯峨中学校	3年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
梅　原　侑　理　沙	京丹波町立和知中学校	2年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
漆　垣　皓　大	京都市立桂川中学校	2年
優秀賞（京都新聞賞）		
西　山　満　琉	南丹市立園部中学校	1年
優秀賞（京都新聞賞）		
深　尾　ま　り　ん	京都市立栗陵中学校	3年
優秀賞（KBS京都賞）		
山　内　颯　太	綾部市立八田中学校	2年
優秀賞（KBS京都賞）		
竹　中　裕　貴	京都市立桂川中学校	2年

※ 氏名等には常用漢字を使用しています。

第12回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏 名	学 校 名	学 年
佳 作	山 田 大 翔	京都市立嵯峨中学校	3 年
	工 藤 佳 那	京都市立中京中学校	3 年
	谷 井 亜 斗 夢	京都市立烏丸中学校	3 年
	松 山 瑚 春	京都市立嵯峨中学校	1 年
	森 文 音	京都市立北野中学校	1 年
	中 西 陸 駆	南丹市立八木中学校	3 年
	小 原 彩 芽	京丹波町立瑞穂中学校	2 年
	森 本 真 依	与謝野町立加悦中学校	3 年
	平 井 穂 乃 香	京都府立園部高等学校附属中学校	3 年
	植 村 結 友	京都府立福知山高等学校附属中学校	2 年
入 選	辰 島 麗 美	京都市立嵯峨中学校	1 年
	片 岡 花 乃	京都市立開晴小中学校	9 年
	熊 谷 優 花	京都市立桂川中学校	2 年
	久 保 琳 奈	京都市立栗陵中学校	3 年
	森 山 孝 太 郎	京都市立東山泉小中学校	9 年
	芦 田 恵 理	南丹市立殿田中学校	2 年
	山 崎 美 緋 歌	京丹波町立蒲生野中学校	2 年
	長 谷 川 天 琉	舞鶴市立城北中学校	1 年
	中 村 明 日 美	京都府立園部高等学校附属中学校	3 年
	田 中 海 星	京都府立須知高等学校	1 年

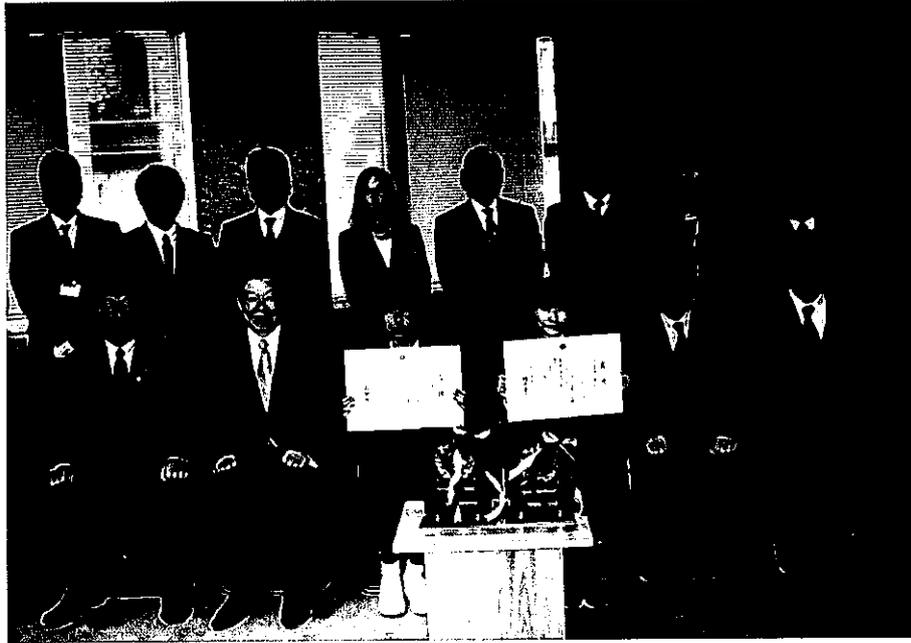
※ 氏名等には常用漢字を使用しています。

※ 京都市立開晴小中学校及び京都市立東山泉小中学校は9年制で表示しています。

最優秀賞などの授賞式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の授賞式

平成30年1月24日 京都府庁



山田啓二京都府知事、橋本幸三京都府教育委員会教育長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育長賞の授賞式

平成30年1月22日 京都市役所



門川大作京都市長、在田正秀京都市教育長から賞状が授与されました。

歴代最優秀賞受賞者一覧

第1回（平成18年度）～第12回（平成29年度）

	京都府知事賞	京都市長賞
1	長岡第二中学校 安川 愛佳	京都市立高雄中学校 寺島 千尋
2	京都府立洛北高等学校附属中学校 村上 花	京都市立堀川高等学校 藤田 紫穂
3	京都府立園部高等学校 大森 しおり	京都市立松尾中学校 杉浦 由佳理
4	京都府立園部高等学校 奥村 麻衣	京都市立嵯峨中学校 木村 瑞季
5	亀岡市立東輝中学校 加藤 優生	京都市立嵯峨中学校 卯滝 由季
6	京都府立須知高等学校 星山 紗輝	京都市立伏見中学校 中西 ひなた
7	宮津市立栗田中学校 池永 佳菜子	京都市立伏見中学校 大澤 未希
8	大山崎町立大山崎中学校 浅野 陽香	京都市立伏見中学校 岡嶋 良太郎 ※全国スピーチコンテスト：奨励賞
9	京都府立鴨沂高等学校 石田 裕貴 ※全国スピーチコンテスト： 北対協理事長賞 花阪 大輝 京都府立園部高等学校附属中学校	京都市立嵯峨中学校 田中 亜門
10	京都府立園部高等学校附属中学校 十倉 希望	京都市立嵯峨中学校 児玉 宜伸
11	南丹市立園部中学校 高屋 瞳華 ※全国スピーチコンテスト： 審査員特別賞	京都市立嵯峨中学校 児玉 宜伸
12	南丹市立園部中学校 藤内 空菜	京都市立嵯峨中学校 宇佐美 智也

(応募数・応募校数)

1	404点	20校	7	1430点	18校
2	895点	25校	8	1740点	18校
3	1938点	33校	9	1545点	18校
4	1304点	20校	10	1471点	22校
5	1979点	24校	11	1302点	18校
6	1481点	15校	12	1448点	24校

京都府北方領土教育者会議について

- 1 設 立 平成18年 3月
- 2 設立趣旨 北方領土問題の解決のために次代を担う青少年が北方領土について関心を持ち、正しい理解を深めるために教育関係者の会を結成して諸活動を行う。
- 3 会 員 京都府内の中学校・高等学校教員等
- 4 主な取組
 - 「北方領土と私たち」作文コンクールの実施（平成18年度～）
 - ・第12回コンクールを実施（応募校24校、応募数1,448点）
 - 実践推進指定校事業の実施
 - ・2校（活動支援経費1校10万円、研究授業の公開、作文コンクールへの参加）
 - 各種研修会への教員・生徒の派遣
 - ・四島交流事業（国後島、色丹島、択捉島）
 - ・現地視察研修会（根室市域）
 - ・近畿ブロック研修会（近畿各府県）
 - 「北方領土全国スピーチコンテスト」への参加
 - その他、北方領土教育に関する事業の実施・調整 等
- 5 組織体制
 - 会長（1） 副会長（1） 事務局長（1） 事務局次長（1） 運営委員（若干名）

●各種研修会等への参加状況について （参加者実績：教員＋生徒）

年度	北方四島交流	教育指導者研修 （根室市）	視察研修 （根室地域）	近畿ブロック研修会 （6府県）	備 考
24	国後3	2		17（滋賀）	
25		2	28	43（京都）	
26		2		22（大阪）	
27	国後2、択捉1	2	20	18（兵庫）	
28		2		9（奈良）	
29		2		18（和歌山）	

● 実践推進指定校について

年 度	19	20	21	22	23	24	25
京都府	園部高	園部高	園部高	東輝中	東輝中	日置中	南桑中
京都市	八条中	伏見中	大枝中	山科中	嵯峨中	西賀茂中	烏丸中
年 度	26	27	28	29			
京都府	城北中	和知中	蒲生野中	園部中			
京都市	中京中	上京中	梅津中	北野中			

入賞作文

七〇年もの壁を越えるには

南丹市立園部中学校
一年 藤内 空菜

「七〇年も越えられない壁を越えるにはどうしたらいいのだろう。」

ロシアと日本の間にある北方領土をめぐる問題は、すでに七〇年という長い年月、解決することなく続いています。それなのに、同じ日本人でありながらこの問題を「自分とは全く関係ない。」と思っている人も少なくないかもしれません。私もその一人でした。

中学校に入り、北方領土について学び、驚きの事実を知りました。第二次世界大戦後、ソ連軍は突然日本を占領し、日本人を追い出したのです。私はこれが許せませんでした。それなのに現在日本はロシアに医療支援を行っているのです。どうして日本から領土を奪ったロシアを助けるようなことをしているのか。到底理解できませんでした。

一方でこんな出来事を知りました。六年前、日本が東日本大震災にあった時、様々な国の中で、ヨーロッパのセルビアという国が日本を支援してくれました。セルビアは経済状態が苦しく、国民の平均収入は世界の平均収入の半分と言われています。それなのに二億円もの寄付金を集めてくれたのです。なぜそこまで思いを寄せてくれたのでしょうか。セルビアは一九九八年に起きたコソボ紛争により壊滅的な状況になりました。でもコソボのアルバニア人をセルビアが虐殺したとして非難の目にさらされていたので、支援を受けることが難しかったのです。そんな時、真っ先に支援を行ったのが日本でした。

日本は医療、交通整備などの支援を行いました。このことをセルビアの人々は深く覚えていてくれたのです。私はこの時初めて、日本が医療支援をしている理由が分かった気がしました。人は「自分を大切にしてもらった。」という思いがある時、心からその人を大切にできるのではないかと。いうことです。

私の学校の先輩が数年前、交流事業で国後島に行かれた時、ロシアのある女性が次のようなことを言っておられたそうです。「我が国がこの島を日本に返す決断をしたところがないのです。」と。不法占拠とはいえ、七〇年以上もそこにロシアの人の生活があるのです。この人達を無理やり追い出してしまったら、また新たな悲しみを生み出すことになってしまいます。でも、一方で、ほんの数キロ先にある故郷に帰り、お墓参りも自由にできない元島民の無念も忘れてはならないのです。元島民の方々の思いも、今島に住んでいるロシアの人の生活も大切にしながら、みんながこれ以上の悲しみを背負うことのないようにするためにどうしたらよいか。この難しい壁を越える唯一の方法は、セルビアの方々が示してくださったような、相手を心から大切にすることによって生まれる「絆」と「信頼」だと思いました。大きな病院や医療関係者の教育機関がない北方領土の人々にとつて、日本の医療支援はなくてはならないものです。この取組を地道に積み上げていくことで、ロシアとの「絆」と「信頼」を深めていくことは、とても重要なことだと思います。

中学生の私が実際にできることは少ないかもしれませんが、これは日本人の一人一人の問題だと自覚して、自身が今回考えたことを少しでも多くの友達に話していきたいです。そして、これから出会う多くの人と一緒に日本とロシアの問題を解決するために、「絆」と「信頼」を深めていく取組を進める一人になっていきたいです。

最優秀賞(京都市長賞)

北方領土の返還を願う

京都市立嵯峨中学校
三年 宇佐美 智也

八月、一年の中の単なる一か月に過ぎないと多くの人に思われているに違いない。しかし、実は「北方領土返還運動全国強調月間」と定められている。

この事実を知っている日本国民はどれくらいの割合いるのだろうか。私自身は、中学校に入学し、北方領土についての作文を書くことや社会科の授業の中で学習を通して知ることになった。そして、街頭で署名活動が行われていることや北方領土青少年等現地視察支援事業を理解した。このようなことを以前の私のように「ほとんど知らない。」という日本人は、かなりの割合で存在するのではないだろうか。

ニュースなどの報道を見ると「北方領土についての対話が行われた。」という程度の紹介しかないことが多い。「今の北方領土の状況はどうなっているのか」や「北方領土が外交問題として何度も取り上げられているのはなぜか」についての報道は、あまりなされない。これでは、多くの国民の理解を得ることはならないし、関心を高めていくことに繋がらない。だから、北方領土問題の論議は、一部の政治家等でのみで行われていると感じてしまう。これは大きな問題である。この問題の事実や現状をしっかりと理解すれば政府だけでなく、多くの国民も北方領土返還への思いは強くなるはずだ。そうすれば、国民一人一人の声が、政府間の交渉に直に届くような状態となりうる。昨年の五月、ア

メリカ大統領のオバマ氏の広島訪問を実現させた要因の一つである被爆者からの手紙のように、元島民はもとより、多くの日本人の心の声をロシア政府に伝えていくようになってほしいと切に願う。

日本とロシアの協議は難航しているが、二国間の関係に雪解けを感じさせるようなエピソードはあった。それは、一九九〇年にロシアの三歳の少年、コンスタンチン君の命を救う出来事である。サハリン州に暮らしていたコンスタンチン君は誤って熱湯入りのバケツを倒し、全身の九〇%を火傷するという事故があった。重度の大火傷で、地元の病院では手の打ちようがなく、七〇時間の余命を宣告される事態となった。家族は、医療技術の進んでいる日本に最後の望みを託し、それに応えた日本政府は援助の手を差し伸べた。東西冷戦の影響が残る中、外務省が交渉してサハリンに日本機を「仮上陸」させ、コンスタンチン君を日本に連れてきた。医師の懸命な手術の結果、彼は一命を取り留め、回復するに至った。彼を救うための医療費は、日本での募金活動で賄われ、その額は一億円にもなった。これこそが協力であり、二国間の友好を示すものと感じた。私は、テレビの特番でこの事実を知ったときに強い衝撃を受け、心の底から感動した。

一七、二九一という数字は、終戦時に北方領土に住んでいた日本人の数を表している。終戦から七二年を迎え、その数字は残念だが減少の一途をたどっている。最後の一人となる前に、いや一人でも減ずる前に、北方領土問題の解決の糸口でもいいから見つけ出さねばならない。最近、ロシアのプーチン大統領は、千島列島に軍事施設を建設するため、滑走路を建設し、その他のインフラ整備も進めていると聞いた。しかし、択捉島には旧ソ連軍上陸に對した日本軍の戦車の残骸が残っている。武力

による占領をした旧ソ連と同様に、再びロシアが武力に頼ろうとしているのではないだろうか。軍事施設が増設されれば、日露の友好関係に水を差すことになり、深い溝ともなり得る。そうなる前に北方領土問題を平和に解決して欲しい。

日本とロシアが、歩み寄った歴史はある。ただ、二国間の関係は常に安定しているとは言いがたい。私は、今までの出来事を振り返りながら北方領土返還への願いをまとめてきた。当然ではあるが、一人の力でどうなる問題ではない。だからこそ、繰り返しになるが、多くの国民が北方領土に関心をもつことが大切である。そして、思いを一つにし、その意志をロシアに届けていきたい。そして、これまであまり触れられてこなかったが、故郷を奪われた島民の人権問題も、この両国で考えていくべきではないだろうか。

これからの時代を託された私たち中学生にできることは、署名や募金を集める程度のことと思われるかもしれない。でも、一番大切なのは、北方領土問題と正面に向き合うことだと確信している。最初は、身近な人と少し話をしてみるだけでも良い。これを繰り返す中で、多くの人と交わり、考えを交換することを通して、早期解決と平和的な解決へ結び付けていけるのではないだろうか。私は、今までの両国間の出来事や日本人の努力などを調べる中で、改めて強い意志をもった。それは、北方領土の一日も早い返還を実現することである。

優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

武力を持たない国として

京都府立洛北高等学校附属中学校
二年 塚田 真菜望

「北方領土」、ニュースや学校の授業ではよく耳にするけれど、京都に住んでいる私たちからはとても遠く、あまりなじみのない言葉だ。しかし今回北方領土について調べていくうちに少しずつ北方領土の本当の姿が見えてきた。

私たちは、北方領土問題を解決するためには、日本とロシア、双方の意見や立場を理解し尊重することが必要不可欠だと思う。そのために私たちができる事は、国民一人一人が北方領土について正しく「知り」、国に向けて発信していくことだと思う。私ははじめ北方領土はロシア兵が来て、島を占領しただけだと思っていたが、以前からロシアと島の人々との交流はあり、日本とロシアの子どもたちの仲がよかったことや日本人を追い出す際にも、島の農業や漁業、教育の発展の面から、ロシア側に引き留められた日本人もいたことを知った。「北方領土」という言葉は、日本のだれもが習う言葉だが、その言葉と今の問題を結びつけて本当の姿を見つめるということとはとても難しいことだと思う。北方領土問題は日本の領土問題の中で歴史が長く、深い問題だ。だからこそ、学校の授業等で調べ学習をするなどして理解を深めるべきだと思う。

戦後約七〇年、日本はたくさんの問題を「協力」や「話し合い」で解決してきた。唯一の被爆国であり、平和を重視する日本だからこそ、ロシア側の意見も考え、「協

力」という方法を提案すべきではないだろうか。実は今、平和条約締結という条件付きではあるが、ロシア側も歯舞群島と色丹島の返還に同意している。このことは、全島返還までの道のりは遠いけれど、私は大きな一歩になると感じた。

しかし、何故二島なのか。私が考えたことは、①ロシアは冬になると海が凍り、漁業ができなくなるため冬でも凍らない漁場が必要だということ、②今でもたくさんロシア人が島で生活しているため、返還によって島を追い出されないようにするためだ。他にも理由はあると思うが、これらは日本との協力によって解決できると思う。日本でも元島民の方々も島を訪れ墓参をしたいと希望している。北方領土はもはや日本とロシアの両方にとってなくてはならないものとなっている。

そこで私は日本とロシアが協力して行う共同経済活動に期待している。この方法はすでに日本政府も同意している。私はこれを見た時、とても日本らしくよい方法だと感じた。そして今後、経済だけでなく政治の面など多方面で両国の長所を生かすことができれば、島はとても豊かになると思う。昔はロシアと島の交流もあったのだから、今でもできるのではないか。協力し合い、発展しあうという考えは、武力を持たない平和な日本だからこそできる日本らしい考え方になるはずだ。

今回北方領土を調べ考えたことで、私は日本の領土問題について知り、大きな関心を持った。だから、これからも日本の抱える国際問題についてしっかり考えていきたいと思う。

優秀賞(京都市教育長賞)

人ごとではない北方領土問題

京都市立北野中学校
一年 村瀬 歩実

「次は北方領土の問題についてです。」
私はニュースなどでこんな言葉を聞いても無関心だった。つまり人ごとのように思っていたのだ。しかし、社会の時間に北方領土について学習し、私はたくさんのごとを知った。それと同時に、北方領土問題について、全く認知していなかったことを思い知り、今になって問題の大きさに気づいたので。

一九四五年、ソ連は北方四島のすべてを占領した。そして一九四六年、北方四島を一方的に自国領に編入し、当時四島全島に暮らしていた一万七千人もの日本人を、強制的に追い出したのだ。突然の出来事に住民は不安と恐怖に襲われただろう。そんな気持ちの中、住民の約半数は、ソ連軍の厳しい監視の目をくぐり抜け、故郷の島々を脱出したのである。他の住民はそのまま残ったのだが、一九四七年から一九四八年にかけて劣悪な環境の樺太經由の引き揚げを余儀なくされたのであった。そのため、日本の領土でありながら、誰一人日本人は住んでいないのだ。何も知らなかった私には、驚きの事実であった。

北方四島は、日本がロシアより早くその存在を知ったのだ。それは今からおよそ三九〇年以上も昔のことである。ロシア人が初めて千島列島や北方領土を探索したのは、日本が見つけてから一〇〇年ほどたってからなのだ。また、一七二二年にロシアの探検隊が作成した地図には、北方の島々は、「日本の島々」と明記されている。そして今まで一度も北方四島が他国の領土になったことはな

いのだ。つまり、「日本固有の領土」ということだ。
今、元住民の方々の高齢化が進んでいる。元住民の人々は、故郷で暮らしたいと思っている。このような人々のためにも、一刻も早く解決しなければならぬ問題である。

そこで、日本は今、どのような活動をしているのかを調べてみた。まず一つは、北方四島交流事業だ。一九九一年、ソ連側から日本国民と四島住民との交流を行うことが提案された。翌年からパスポート・ビザなしの北方四島交流事業が始まった。これは北方領土の解決を含む日露間の平和条約締結問題解決のための環境整備を目的として、北方四島在住ロシア人との相互理解を促進するために実施している。この取組によって、元住民の人々は祖先のお墓参りに行くことはできるようになったのである。しかし、その祖先の方々が汗を流し開拓した地で、まだ住むことができないのだ。

そこで、もう一つの活動。それは北方領土返還要求運動だ。北方領土返還実現のための外交交渉を強力に後押しするためには、世代を超えて国民一人ひとりがこの問題を正しく理解し関心を高め、国民世論の結集を図ることが大切なのだ。そうした認識のもと、全国に都道府県民会議が結成され、活発な国民運動が行われている。

このように様々な取組がある中で、私が一番重要だと思うこと。それは、元住民の人々だけでなく、同じ日本人として一人ひとりが自分のことのように思い考えていくことだ。私はこの作文を書くにあたって、北方領土に詳しくなった。だからこそ、考えることや感じることもできた。ロシア人住民を尊重しつつ、北方領土返還というのが私の理想だ。そのような思いを抱く人を増やすには、知っている人が大勢の人に伝え、発信していくことが不可欠だ。

私は、北方四島の元住民の人々が、一人でも多く再び住民となって故郷で暮らせるように願っている。心の底から。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

国際理解によるソリューション

京都府立園部高等学校
一年 高橋 怜奈

北方領土問題は、教科書の中だけの出来事ではなく、日本における外交問題の在り方の是非を問う事柄である。

約一年前に行われた日ロ首脳会談では、安倍首相のふるさつである山口県にプーチン大統領を招き入れ、ふるさとを大切に思う気持ちを交えながら、慎重に交渉を重ねていたのが記憶に新しいだろう。日本がここまでロシア側と問題解決のための親交を深めているのは、これまでに類を見ないことだ。

しかし、私は実際はそううまく解決する方向へ進んでいるとは思えない。問題なのは、プーチン大統領の発言が、その時々で日本にとって肯定的な意見と否定的な意見のどちらともを述べて、二転三転しているという点だ。このことが問題解決への不安要素をますます煽っているように感じられるし、いつまで経っても平行線のままになりかねないという焦燥感をもたらしている。

また他の国々は、この問題については、腫れ物には触らない方がよいという感じの見解を示しているところが多いが、この問題について理解を得るにはまず、日ロ両国はもちろん、それ以外の国や地域の人々の北方領土に対する国際理解を深めることが最重要課題だと言える。その理由として挙げられるのは、世界で一番有名な百科事典として知られるブリタニカ百科事典の「北方領土」というワードに関する記述である。そこには、「千島に

は最初にロシア人が住み着いた。しかし、一八五五年日本人が南千島を奪い取り、一八七五年には全千島列島を占領した。その後ロシアに譲り渡されたが、今でも日本は南部諸島に対する歴史的な所有権をロシアに主張している。」とあり、ロシア側に圧倒的有利かつ日本に対する誤解を招きかねない記述がされているという事実だ。この記述を変えない限り、ロシア政府は、全世界がロシア側の主張に賛同していると思ひ込み、日本の言い分を全く聞き入れなくなってしまうという懸念があるのだ。

もはやこれは、二国間関係の中だけでは解決しきれない問題であり、他国の道徳的で正しい判断にしか委ねられないと言っても過言ではない。そのためにも、他国の人々にもっと北方領土問題に対する興味関心を持ってもらわなければならないのだ。

ロシアの一方的な不法占領から七二年の歳月が過ぎ、元島民の方々の平均年齢も八〇歳を超えた今、それでもなお悲痛な叫びを胸中に抱えている方々は多数いらっしゃる。自分が生まれ育った故郷に、日本国の領土としてもう一度足を踏み入れることがかなうよう、私たちは声を挙げ続けなければならぬ。そしてプーチン大統領をはじめ全世界の人々に、誠実で正しい判断を促すとともに、「北方領土は日本固有の領土だ」ということを理解し賛同してもらえようように努めていかなければならない。

優秀賞(北方領土問題対策協会理事長賞)

誇りに思える地になるために

京都市立嵯峨中学校
三年 川島 花菜

北方領土問題とは、ロシアによる法的根拠のない領土の占領のことです。なぜこのような問題がおきたのでしょうか。

きっかけは、一六四四年、江戸幕府が松前藩に「国絵図」の提出を命じたことです。この時に松前藩が幕府に提出した自藩領地の地図には、「くなしり」、「えとほろ」など三十九の島々が書かれていました。よって日本はロシアよりも早く北方領土を発見していたのです。一方ロシアは、一七一一年に初めて千島列島を発見しました。ロシアが発見する約一〇〇年も前からその存在を知り、多くの日本人が生活し、父祖伝来の地として受け継いでいました。そして、今から一六〇年以上前の一八五五年二月七日、日本とロシアは日魯通好条約を結びました。この条約では、両国の国境は択捉島とウルップ島の間に決められ、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は日本の領土とされました。そしてウルップ島から北の千島列島はロシアの領土とされました。この時の樺太は両国民の混住の地と決められました。次にかわされた条約は一八五七年、樺太千島交換条約です。この条約では、日本が千島列島をロシアから譲り受ける代わりに、樺太全島を放棄するという内容でした。次は、一九〇五年、ポーツマス条約です。この条約は日露戦争がきっかけでした。日露戦争では、日本軍が有利な状況で戦っていたため、北緯五十度以南の南樺太が日本の領土となりました。そ

して、一九五一年、サンフランシスコ平和条約です。この条約では、日本が千島列島と南樺太の権利権限及び請求権を放棄しました。しかし、放棄した千島列島には択捉島、国後島、歯舞群島の北方領土は認められていません。なお、この条約では放棄した地域が最終的にどこに帰属するかについては、何も決められていませんでした。これらの四つの条約から見ても分かるように、北方四島はまだまだかつて一度も外国の領土となることがない我が国固有の領土であり、ロシアによる北方四島の占拠は、法的な根拠なく行われているのです。この問題に対して日本はどのような対策をとっているのでしょうか。

北方領土返還実現のための外交交渉を強力に後押しするためには、国民が問題を正しく理解し関心を高め、国民世論の結集を図ることが大切だという認識のもとに、二月と八月を「北方領土返還運動全国強調月間」と定め、大会やパネル展、街頭啓発、署名活動など活発な国民運動が行われています。また、一九八一年、政府の閣議了解により、二月七日を「北方領土の日」と定められました。これらのように、私の知らないところでたくさんの方々が活動がされています。

私は、この北方領土問題を日本国民全員が理解し、北方領土が返還されるために行動をおこすべきだと強く感じました。そのために二月七日の「北方領土の日」を休日にし、国民全員に知ってもらわなければならないのです。また、全国のスーパーやコンビニに北方領土の問題に関するポスターを設置し、一人でも多くの人に知ってもらえるきっかけをつくればいいと思います。日本国民全員が一つになり、助け合う時です。だから、今こそ立ち上がりましょう。日本国民が明るく、誇りを持って北方領土に行けるようになることを願っています。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土、望む本当の解決へ

京丹波町立和知中学校
二年 梅原侑理沙

ニュースを見てみると、ときどき耳にする北方領土についての問題。私はこれを聞くたびに思っていたことがある。

「何故、七〇年もたっているのに解決しないのか」と。しかし、実際は「七〇年も」ではなく、「七〇年しか」たっていないのだ。今回、北方領土について調べてみて一番にそう思った。

約七〇年前、ソ連の兵士たちは銃を向けてそこに住む人たちの土地や財産、そして自由を奪っていった。その時受けた島民の人たちの心の傷は、私にはとうていばかりしれない。ただ一つ、想像するにその傷は七〇年以上たった今でも消えてはいない。そして現在、そこにはロシアの人たちが住んでいる。

ところで、仮に北方領土が日本のものとロシアが認められた時、彼らはどうなるのだろうか。また同じことを繰り返すのだろうか。そのことに関して調べてみると、日本に住んでいる人の人権、利益及び希望は十分に尊重するとしている。しかし、そう言われたからといって簡単に納得できるものではないと思う。こういったところに領土問題が解決しない一因があるのだと思う。

今、住んでいる人、七〇年前島から出ざるをえなかった人。この人たちの気持ちは絶対に無視してはいけない。北方領土問題において一番重要なのは、北方領土がどちらの国のものかということよりも、それに関係する人の

気持ちなのではないかと私は思う。

現在、北方四島への訪問、そこに住んでいる人たちとの交流が積極的に行なわれている。これには、相互理解を促進させる目的があるそうだ。こういった取組を通して、お互いの気持ちを理解し、歩みよりのきっかけになっていってほしい。

今回、北方領土について調べてみてこの問題に対する考え方が変わった。そして、これは日本国民全員に関係することなんだと思うようになった。

一度こわれてしまった信頼、離れてしまった距離はもう元にはもどらない。だからこそもう一度新しい関係を創っていかねければならない。以前よりもっと強くて確かなものを。そのためにもっと自分たち国民がこの問題に興味をもつ必要があると思う。「自分には関係ない」ではなく、新しい関係を創るためには一人ひとりがこの問題にむき合い、相手を知ることが大切だ。

もう七〇年もたった。しかしまだたった七〇年。七〇年前に起きたこと、受けた傷、壊れた信頼を全てなかったことにはできないが、新しく何かを築くには、離れてしまった距離を取り戻すには、まだたった七〇年しかたっていないのだ。

北方領土問題には「人の気持ち」が深く関わっている。きつと領土がどちらの国のものかはつきりしたとしても、この問題が本当に解決したことにはならない。これから先、何十年かかったとしても、両国の国民が納得できる答えが見つかることを深く望んでいる。そして、そのためにも、私は、今一番大切なことは何なのか考えた

優秀賞(北方領土返還要求京都府民会議会長賞)

心で伝えること

京都市立桂川中学校
二年 漆垣 皓大

なぜか日本人が立ち入ることの出来ない島々、北方領土。私が住んでいるここ京都は、北方領土から遠く離れた場所ですが、ニュースや新聞で見たり聞いたりしたことは何度かあります。しかし正直に言って、私にとって北方領土問題は、距離の面でも意識の面でもかけ離れたところにあつたのです。

でも少し前、北海道に住む中学生が現地を訪問し、ロシアの方々と交流して、領土問題を解決しようとしている姿をテレビ番組で見ていると、同じ中学生なのに自分は何もしていないのがとても情けなく、恥ずかしいように思えてきたのです。それが、「北方領土問題は、同じ日本人である自分にも関係があるかもしれない」と思つた初めての瞬間でした。その気持ちは、「私もいつか北方領土をこの目でみてみたい」という思いへと、徐々に変化していきました。そこで私は、北方領土について歴史や課題など色々な視点で調べてみることにしました。が、いざ調べてみると私が思っていた以上に様々な問題が浮かび上がってきたのです。

元島民の方々の高齢化が進んでいることから、日本は北方四島が日本固有の領土であるという今までの歴史的な証拠を示して、早急な返還を要求していますが、ロシア側はほとんど聞き入れようとしていません。つまり、日本が真剣に話し合おうと働きかけているにも関わらず、聞く耳を持つとうとしないのです。これは、明らかに

ロシアにとって都合の悪いことへの回避だと思えます。しかし私たちは、第二次世界大戦で北方領土を占領された後、ロシアから移り住んできた人々やその子孫が今も住んでいることをよく考えなければならぬかもしれない。もし今、北方領土が解決して、北方領土に住んでいるロシアの人々に、ここは日本の領土だから本国へ戻って下さいと言ったとします。そうすれば、この人たちの住み慣れた家や仕事場、友達などの生活が突然なくなり、この人たちにとっていつもの日常ではなくなってしまう。これは昔、日本がソ連に追い出されたときの様子とほぼ同じものになってしまいます。私でも絶対にいやです。元島民のかたならば、生まれ育った故郷を追われた悔しさは、もつとよくわかつているはず。同じ過ちを繰り返さないために大切にすべきことは、人を想う心だと私は思います。ロシア側のことも考えて、北方領土問題を一つ一つ地道に解決に導いていくのが、我が国日本であると私は信じています。

日本に住んでいる以上、北方領土問題を無視して生きていくことはできません。また、私たち日本人が得意な「心」で想いを交わして、お互いの信頼関係を築いていくことが大切だと私は思います。そして、いつの日かその努力が意義のあるものになることを心から願っています。

優秀賞(京都新聞賞)

思いやりの心を目指して

南丹市立園部中学校
一年 西山 満琉

「日本の多くの方が被災されたことにショックと悲しみを抱いています。どうか私たちに皆様の苦しみを分かち合わせてください。」

これは、二〇一一年三月一日に東日本大震災が発生し、カンボジアのある村の人々約三十人から寄せられた義援金に添えられていた文章です。この事実を知ったとき、私は北方領土問題のことを思い出さずにはいられませんでした。

北方領土では一九四五年の終戦から七〇年以上、元島民の人々は故郷に帰ることができていません。それでも北方領土は「我が国固有の領土」という事実に変わりはないのです。自分の大切な故郷が目の前にあるのに帰りがたくても帰れない。もし自分が元島民だったらと考えると、とても辛い気持ちになります。しかし今、島に住んでいるロシアの人々を追い出してしまったり、また同じ悲しみの繰り返しとなってしまう。私は最初、両国が辛い思いをせずこの問題を解決するには、もっと話し合い、交流を深める必要があると思いました。でも、それだけでは何か足りません。日本とロシアの間にある七〇年の大きな壁を越えるにはもっともっと大きな力が必要なのです。そんな時、カンボジアの人たちのことを知ったのです。

カンボジアのその村は、内戦で多くの地雷が埋まり、その被害で経済的にとても苦しい状況が続いています。

た。日本のNPO法人は「地雷原を綿畑に！」と村を支援し、徐々に収入が得られるようになっていったそうです。それでも村人の平均年収は一家族約七万円足らずです。しかし村の人々は、少ないお金を出し合い、約八万円もの義援金を日本に送ってくださったのです。今の日本にとつての八万円と、村の人々にとつての八万円は重みが全く違います。相手を思い、相手の苦しみを分かち合うという、これほどの思いやりが世の中にあると知り、私はとても感動しました。そしてこの思いやりこそが、日本とロシアの間にある問題を解決する方法だと思ったのです。

現在、日本は北方領土に対して患者の受け入れ、医師や看護師の研修などの医療支援を行っています。二〇〇三年から二〇一五年の間で受け入れた患者の人数は約二〇〇〇人です。最初は、どうしてそんなことをするのかと思いましたが、北方領土問題という大きなものを打ち砕くのは、この方法しかない。今でははつきり思います。日本の思いやりの気持ちを伝え続け、信頼できる関係を築くこと。日本とロシア双方の島民の共存を目指すことで、両国が納得できる解決策が見つかるのではないかと思いました。

北方領土問題は簡単に解決できる問題ではありません。だからこそ、私たち一人一人が北方領土問題について関心を持ち、問題の解決を訴えていく必要があるのではないのでしょうか。そのためにも、私は日頃から思いやりと感謝の気持ちを持つことができるようになりたい。そして、この国の国民の一人として北方領土問題について関心を持ち、どんなに大きな壁であつても「思いやり」の心を持って乗り越えるために行動できる人でありたいと思います。

優秀賞(京都新聞賞)

踏み出す一歩

京都市立栗陵中学校
三年 深尾 まりん

「何も自分には出来ない。」

と私は思っていた。よくテレビのニュースで北方領土について専門家の人達が話し合っているのを何も考えずに見ていた。はつきり言って自分の国の事なのにどうしてこんなに他人事なのだろうと思つた事もあつた。だが、この問題は絶対に放つておいてはいけない重大な問題である事を十五歳の私は知つた。

戦後七十二年経つたのに領土問題が出るのはおかしい話である。そしてこの問題によって、未だに平和条約が締結されていない。

そして北方領土問題でも大きく関わっている事、それは資源である。北方領土周辺には豊富な石油、天然ガスが眠っている。また、北方領土近海のオホーツク海も豊富な漁場である。例えば鮭やホタテなど私達の生活にも関わる事のある食材だ。もちろん、このような食材が獲れないとなると、私達の生活にも影響が出るだろう。だが北方領土返還が成立すると影響を受ける人もいる。

実は、北方領土にはロシア人が多く住み、生活を送っているのだ。それに対し、北方領土に日本人は一人も住んでいない。日本であるのに日本ではない様な気がする程、島は違う国の文化であふれているのだ。例えば、学校、家、病院などもしっかりと設備されていて、貧しさはあまり見られない。そんな中、特に気になったのが、やはり外国の文化が入っているのか建物もカラフルであ

る。道路もしっかりとして、確かに生活を送るには充分な環境だといえるだろう。北方領土に住むロシアの人達は北方領土問題についてどう思っているのだろう。返還に賛成なのか反対なのか。そして、元々北方領土に住んでいて、追い出された日本人の故郷はどうなるのか。私は二つの立場に立つてこの問題について考えたが、はつきり言つて、どちらかがどうすれば良いとかそんな簡単な問題ではない事に気付いた。なぜならどちらとも同じ方向を見て進まなければ絶対に解決しないからだ。それに、一人の意見で決める事は決して許されない。今、日本が本当に目をそらしてはいけない問題の一つである。

私は北方領土問題について学んだのだが、私達に出来る事はまずはこの問題をしっかりと理解し、向き合う事である。今の私には無理があるかもしれないが、大人になつてから一度北方領土へ訪れて自分の目で現状を見る事が大切だと私は思う。その場へ行つて今住んでいるロシア人の生活を知り、話を聞いて自分で新たな事を見つけれれると、少しでもこの問題を動かす事ができるかもしれない。

私達に出来る事は小さいことなのだが、みんなが意識を高めれば高める程、問題解決へと近づく。だからこそ、北方領土問題は誰一人と関係のない話ではなく、自分の国や生活を守るためには、私達が動いていくしかない。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土返還に向けて

綾部市立八田中学校
二年 山内 颯太

ぼくは今まで、北方領土問題について深く考えることなく、授業で少し聞いただけで自分には関係ないと思っただけでした。しかし、このように北方領土についてしっかりと向き合う機会があることによって、この問題の複雑さや日ロ両国の主張、返還後のことなどについて考えることが出来ました。

調べていくと、この島々には複雑な歴史があることがわかりました。その中でも、ぼくが特に重要だと思ったことが二つあります。

一つは、一八五五年に締結された日ロ和親条約（下田条約）です。この条約では日本とロシアの境界線は「択捉島と得撫島の間」と定められています。つまりこの時点でロシアは、「北方領土は日本のもの」と認めていることになり、ロシアによる占領は不当だということの確固たる証拠になっていると思います。

もう一つは、太平洋戦争における対日ソ連参戦です。はつきり言って、日本が降伏した八月一日以降のソ連による侵攻は卑怯だと思えます。占領したとしても一九五六年の国交回復時に返還すべきだったと思います。北方領土は、以前日本が占領した朝鮮半島や台湾とは違い、「日本固有の領土」であるため、ソ連による占領、それを継承したロシア連邦による占領は不当であり、許されるものではないと思います。

また、返還に対して両国に温度差があることも問題だ

と思います。日本側は「返還」つまり返してもらおうという立場です。一方ロシアは「譲渡」すなわち譲ってやるという立場をとっています。この考え方が両国の話し合いを進めていく上での大きな足かせになっているのではないかと思います。そのためにも、両国が足並みをそろえた上で「北方領土は日本の領土」だということを、広く国際社会に訴えかけていくことが重要だと思います。またこの問題を考える上で欠かせないことは、返還後の島々をどうするかということです。ぼくは次のようにすれば、平和的に解決できると思います。

まず日本の領土であることを明確にし、基本的には日本の法律を適用するが、当面複雑な事情を考慮した上で特区とし、日ロ両国民が無条件に永住できるものとする。教育、通貨、言語表示などは両国のものを併用、関税も撤廃。

次に車の左側通行の導入、通貨の一本化など、日本としての実効支配を強化。

最後に根室へのフェリー航路の開通、羽田・新千歳などへの空の便の充実化などを行い、日本との経済的な結びつきを強くする。一方でお互いの文化への理解、尊重を深めるための行事などを企画し行政が主催する。

このように、お互いを尊重し、平和で共生できる北方領土は作れます。そのためにも両国が友好を深め、信頼しあえる関係を作っていくことが非常に重要です。その上で日本側の主張も広く理解してもらおうべきだと思います。

優秀賞（KBS京都賞）

「おかしい」だからこそ

京都市立桂川中学校
二年 竹中 裕貴

「おかしいんじゃないか。」

これは僕が北方領土問題を知って、率直に思ったことだ。これはロシアだけではないと思う。理由は、北方領土に住んでおられた方の話を調べていた中に、「日本に見捨てられた」という意見があった。ふつうなら日本の領地だし、本気で取り返すために努力するはずなのに、日本は外交交渉を積み重ねても曖昧な答えばかりである。また、北方領土におられた方々は、日本の領海内で漁をしているだけで非道な扱いを受けていたのに、日本政府は確な対応をとらなかつたと聞いたからだ。

日本政府が動かないのが悪いだけでなく、日本国民全員がこの問題に真剣に向き合うことも必要だと思った。僕もこの話を聞くまでは真剣に考えたことはなかつた。「何か外国のことみたいなき感じ」とまで思っていた。しかし、この話を聞いて昔から住んでいた日本人がいるというのを知って、「おかしい」と思うようになった。なぜなら、北方領土は昔住んでいた人にとっては、大切な思い出の地であり故郷である。もし、自分の生まれ育った大切な地がなくなると、ただただ悲しいと思う。北方領土で生まれ育った方々は、今その気持ちなんだから、思った。だから僕たちは、中学生だからと言い訳せず、積極的に行動に移すのが大切だと感じた。だからといって、現地に行ったりするのはできないし、自分たちができることをしようと思った。例えば、まず知識を身

につけることである。理由は、昔住んでいた人々の高齢化が進み、近い将来には話を聞けなくなり、返還への思いが弱まってしまいかも知れない。だから、まずは自分が知ってから後世に語り継ぐことで返還が実現する可能性が高くなると思うからだ。

交渉をしていく中で、齒舞群島と色丹島の返還を実現すべきという案がある。でも、それはおかしいと思う。理由は、元はすべて日本固有の領土であり、島が一つでも欠けたら日本ではないからだ。

前にも述べたが、この問題はおかしいと思う。だからこそ国に任せ切らず、日本国民全員で向き合わなければならぬと思う。今は一部の国民の願いだが、これが日本中の人々の願いになると世界中の人々も「これはおかしい」と思い、必然的に北方領土返還が実現すると思う。そのためには、自分から始めようと思う人が必要になる。僕もその一人になれるように努力したい。

佳作

北方領土問題

京都市立嵯峨中学校
三年 山田 大翔

北方領土は子供からお年寄りまで、日本人全員に関わる大切な問題です。まず、北方領土とは択捉島、国後島、歯舞群島、色丹島の四島のことです。一九四六年にソ連が当時四島に住んでいた日本人約一万七千人を強制退去させて、それ以降今日までロシアによる占拠が続いています。しかし、北方の四島はあくまで日本のものであるもので、ロシアは法的根拠のない占拠をしています。

私は率直に北方領土を日本に返して欲しいです。というより返してもらわなければいけないと思います。また、北方領土問題を解決しない限り、ロシアと日本の真の友好関係は築けないし、そうなれば日本とロシアの関係は今のままです。もし、北方領土問題を解決でき、日本とロシアが良い関係になれば、アメリカとロシアが良い関係になるかもしれません。アメリカとロシアが手を結ぶことができたなら、世界で今抱えている環境の問題や各国の安全保障の問題がよい方向に進んだりすると思います。また、科学や技術などでも手を結べば宇宙開発が進んだり、私たちの暮らしがより便利になったりするかもしれません。

そのように考えると北方領土問題は日本のみならず、世界の視点で見ても重要だと思えます。そのためには一日でも早く、四島が日本に返還されることが必要です。では、私たちはどうしたらいいのか。実際に北方領土問題に対して動くのは政府です。だから私たちは何らか

の形で政府に強く訴えて、日本政府がロシア政府と根強く交渉して解決するしかありません。いつまでも何もしなかったらこの問題は解決しないままだと思えます。だから北方領土について、最低でも日本の国民はきちんとした知識を持つておかなければいけないと思えます。私はこの北方領土問題が解決しない限りは、本当に戦争が終わり、平和になったとはいえないと思います。ロシアが四島を法的根拠のないまま、占領しているという事は、日本の領土をロシアが支配しているともいえると思います。だから、日本はこれからも、北方領土問題と向き合っていかなければいけません。

そして自分自身ももっとこの北方領土問題について関心を持つとともに、考えたり、歴史を学んだりしていきたいと思えました。

戦後七十年以上たっても解決しない世界の国どうしの問題、日本は北方領土でもめているロシア以外にも韓国との竹島問題、アメリカとの普天間基地移設問題など、世界にはまだまだ戦争後の問題が解決せず、本当の平和が訪れたとはいえません。

だから、少しでも早く北方領土をはじめとする問題を解決しなければいけません。それとともに、世界の国どうしの関係が豊かになったらいいというより、ならなければいけないと私は考えます。

佳作

北方領土について私が思うこと

京都市立中京中学校

三年 工藤 佳那

私は、テレビのニュース番組でよく北方領土のことを耳にします。けれど、私知っているのは現在ロシアに北方領土が占領されているというだけで、そこで、この作文を書くことを機にインターネットなどを使って調べ、自分の思いも書こうと思います。

日本はロシアよりも先に北方四島の存在を知り、徐々に四島の統治を確立しました。第二次世界大戦の末期にソ連は、その当時まだ有効だった日ソ中立条約に違反して対日参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後、北方四島の全てをソ連が占領したそうです。当時、四島全体で約一万七千人の方が住んでいましたが、ソ連は一方的に自国領に編入し、その後、日本人を強制退去させました。そして、今もロシアの不法占拠が続いているそうです。私はこれを聞いてまず一番に思ったのは、住んでいた人達のことです。いきなり自分の住まいから出ないといけないのはとても辛かったと思います。そして、現時点ではそこに帰ることもできない、本当にかわいそうだと思います。だからこそ、もっともっと積極的にロシアに発言をし解決に近づいてほしいです。

日本が北方四島を返してほしいのは出ていかなければならなかった人の為というのもあるけれど、他にも金・銀・銅が採掘できるかもしれないということや漁業の面、日本固有の領土だからなどの理由なのだと思います。ロシアが返したくないのは、食糧確保のためや重要な生

活拠点なのだと思います。お互いたくさんの理由があるけれど、元は日本の領土なのだからロシアは泥棒みたいなものだと思います。だから、ロシアには返すという行動をとってもらいたいです。そして日本とロシアの間にも平和条約を結んでももらいたいです。

私は日本に返してもらおうということ以外に、一緒に生きていくのは可能ではないのかなと思いました。

北方領土のことを調べてみて毎年二月七日は「北方領土の日」というのを初めて知りました。そんな日があるなんて全く知らなかったものでその日を休みにしたりして、もっと私達の身近にし、北方領土返還を国民みんな強く願う日をつくったりするのもいいと思います。

この作文を書くために北方領土について調べてみると知らなかったこともたくさん知れて、返還に対する想いもできてきました。今の私にどうこうできることではないかもしれませんが、「言葉」とかたくさんの人に伝えたいりすること、身近にできることからやっというと思います。

佳作

北方領土について

京都市立烏丸中学校
三年 谷井 匪斗夢

終戦から七十二年を迎えた日本。平和は取り戻されたが、まだ取り戻されていないものがある。それが北方領土だ。

第二次世界大戦終戦当時、ソ連により占領された北方領土はまだ返還されていない。終戦当時北方領土である歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の島民は法的根拠もなく強制退去させられた。現在も日本人は一人も住んでいない。戦後七十二年が経ち、北方領土の島民であった人の中には、故郷に帰れぬまま亡くなっていった人も多くいる。法的根拠もなく退去させられ、故郷でない場所での生活を求められることは、当時の島民の意思に反したあるべきでない事態であったことだろう。その後、北方領土にはどんどんロシアの建物が増え、元島民の故郷の景観が失われつつある。それを黙ってみていなければならなかった元島民の悔しさや辛さも想像できる。戦争のときだったとはいえ、その土地に住んでいる人の意思に反して、法的根拠もなくその土地を奪うことは許されないことだと思う。

戦後から七十二年の期間がたった今でも、北方領土問題は進展していない。北方領土返還にこだわる日本と、それに応じないロシアが互いに譲らず長引いている。このような北方領土問題を考えたとき、なぜ国境というものがあのかと思う。国境があることで、それぞれの国家の利益の追求などの意思の違いから問題の解決が進展

しない。それぞれの国の利益追求のために国家間の争いともなれば、忌まわしい戦争が起こり、人を傷つけてしまふことだけでなく、北方領土のような領土の問題などが繰り返される。戦争の悲惨さを知り、進展しない領土問題を経験している私たちは、平和を追求しなければならぬことを知っている。北方領土問題も国家間の争いではなく、平和的な解決を図りたい。

北方領土は、もう長い間ロシア人だけが居住しており、問題解決を困難にしている。北方領土は豊かな水産資源に恵まれ、ロシアも譲れない場所である。しかし、ロシアからの提案で一九九二年に始まった北方領土四島交流事業で、日本人と北方領土に住んでいるロシア人との交流が進み、相互理解が深まってきている。このような交流を進展させれば、互いを認め合い、尊重して北方領土に共存するという解決策も見えてくるのではないだろうか。既に北方領土に住んでいるロシア人にとっても、元島民の日本人にとっても北方領土は故郷だ。交流によって、ロシア人にも強制的に故郷を失った元島民の思いを知ってもらいたい。国家間の争いから戦争となると、七十二年前に日本が受けたような故郷から退去しなければならぬ状況がロシア人に起こるとも十分考えられ、そのような解決はロシアの人々も望まないだろう。

まず、私たちに求められる行動は日本人とロシア人、そのお互いの意思を尊重し、願いに沿った平和的な解決が図れるように願って、北方領土問題について正しく理解し、平和的に交流を進めることだ。

佳作

「現状を踏まえて」

京都市立嵯峨中学校
一年 松山 瑚春

私は、北方領土作文を書くときわかった時に、何のことかわかりませんでした。でも一つだけ思い当たるものがありました。それは昔テレビで見た北方領土を故郷としている人の番組でした。私はもう一度そのテレビがどのようなものであったかが気になり、インターネットで調べてみました。すると一人の女性が出てきました。

その女性の名前は、小田島梶子さんという方でした。小田島さんは色丹島の元島民で色丹島を故郷としている人です。そこから私は小田島さんとお話されているページを探しました。すると、小田島さんのページに体験談のような文章がありました。その文を読んで私の心に残った文を紹介します。一つ目は小田島さんが五・六年生の時に教室で起きた出来事です。「黒いマントを着用した人が、ガラガラと教室の戸を開けてマントの中からピストルの口を見せてきた。その人らはソ連の人達だった。」という文があります。もし、このような状況に私がいいたら叫んだり震えたりして、静かになんてできなかつたと思います。でもこの教室にいた小田島さんらは静かにしていたそうです。多分静かにしていられたのは誰もがいつどうなるかわからないという危機感を持っていたからなのではないかと思えました。

もう一つは、そのような事があって小田島さんが言われたことが大変に残りました。「お国が違っても一緒だと思ふ。きれいな事かもしれないけれど私は一緒だと思

う。」という事です。これは小田島さんが元島民で、色丹島を大切に愛して愛しているからみんなで大切にしたいかと思ひました。

私は小田島さんのこの文を読んで、自分が大切にしたい場所、愛した場所だったからこそ「一緒」という言葉を言えたのだと思います。私は小田島さんの一緒という言葉から感じたことがあります。それは色丹島に住みたいということだと思ひます。でも色丹島は日本からすれば外国のような状態です。私は小田島さんの事を調べた時に、色丹島の現状という動画を見ました。そこには何の産業もなく、活気にあふれていない色丹島がありました。他の島も活気にあふれていないといえませんでした。だから私は一緒に住んで日本の技術を使い、活気にあふれていない島々を都市化させていけばいいのではないかと考えました。

佳作

「風化」させないで、北方領土

京都市立北野中学校
一年 森 文音

「国後・歯舞・色丹・択捉」何度も唱えて書いて覚えてきた北方領土の四つの島の名前。私にとっては、何一つ関係のないただの社会科の暗記用語の一つでしかありませんでした。中学校の授業では、小学校で習っていないこともビデオなどを見て学習しました。

北方領土は、北海道の北に位置する四島を指します。第二次世界大戦直後の八月一日に、ソ連軍が千島列島に上陸し、その後次々と北方領土を占領していき、今でも北方領土は日本に帰ってきていません。多くの条約を結んでいますが、北方領土は一度もロシアの領土にはなっていないませんでした。

日本は、ロシアより約一〇〇年も前から、北方領土の存在を知っていました。その後、北方領土には、約一万余七千人の人が住んでいたにも関わらず、ロシア人に強制送還させられました。そして、日本人は今現在、誰一人として住んでおらず、ロシア人のみが生活しています。このような北方領土問題が、本当に解決する方向へ向かっているのか、さらに調べました。そうすると、「北方領土の日」が二月七日にあることを知りました。二月七日は、一八五五年に、日露通商条約が結ばれた日です。そして二月と八月を「北方領土返還運動全国強調月間」と定め、様々な交流事業が行われていることもわかりました。

私たちが暮らしている京都にも、北方領土の元住民の

方々が暮らしています。その方々の声に耳を傾けると「ビザなし交流に参加し、択捉島に行くことができました。」「もつと北方領土への関心をもってほしい。」とおっしゃられています。他にも、落語を通じて、ロシアとの関係を深めようと運動している方がいることもわかりました。

こういった活動をしておられる方がいるにも関わらず、戦後七十年以上経過した現在、北方領土問題の進展はありません。北方領土問題の広報を見ると、私たちを含め若い世代の関心が薄れてきているという現実も知ることができました。さらに北方領土についての意見で、島民たちのことを知らないために、「怖い」「北方領土に住みたい人がどれだけいるんだよ」などのコメントも存在していました。これは北方領土問題が「風化」しているのではないかと心配になりました。私たち若い世代が「もつと北方領土について関心を持ち、次の世代へとつなげていかなければならない」と強く感じました。

「返還」のために、たくさんの人々が全国各地で運動を行い、さらに「返還」への祈りと決意を象徴する「四島のかげ橋」「叫びの像」などがあることも知りました。このように返還活動は全国へと広がってきていますが、「ビザなし交流」などを知らない人も多くいるので、もっと広げていかなければなりません。その「ビザなし交流」を通じて、以前島で暮らしていた方、その子どもや孫も、北方領土に関心がある人も「ビザなし交流」だけでなく気軽に島に行き来できればいいと思います。

北方領土に住んでいるロシアの人も、私たちと同じように普通に毎日を送っていると思います。だから、私たちとロシアの人が同じ立場で「共存」して暮らせる、そんな島になることを願っています。

佳作

一日も早い解決を

南丹市立八木中学校
三年 中西 陸 駆

皆さんは考えた事がありますか。ある日突然、自分の住む場所がなくなり、友だちとは離れ離れになり、ふるさとを奪われる悲しさ、憎しみを。

北方領土は第二次世界大戦後以降、ロシアに不法占拠されています。一度もロシアの領土になつたことがなく、日本固有の領土であるにもかかわらず。では何故ロシアが不法占拠を続けているのでしょうか。それは北方領土には自然が多く、漁業なども盛んに行うことができ、生活しやすい環境があるからだと思ひます。

戦後から今までの約七〇年間続く北方領土問題は、何回もの交渉を重ねていますが、ほとんど進展はありません。これからも続くであろうこの問題は、僕たちが解決していかないとけません。そのためにはまず、同世代の人に、この問題について知ってもらう必要があります。今では、この問題のことを知らない人たちも増えてきています。だからもっと多くの人にこの問題の重要性について知ってもらうために、学校の授業で詳しく習う必要があると思ひます。そうすることで北方領土が日本固有の領土で、ロシアに不法占拠されている事を知り、そのために行動する人が増えてくるはずで。

次に、ロシアとの国際交流をすすめることです。国際交流というと難しいイメージがありますが、そうではなく楽しく交流し仲良くなるということです。僕たち若者同士が次世代を背負っていきます。今のうちに仲を深め

ることで、問題解決に近づくと思ひます。次世代を担う僕たちが、ロシアの同世代と交流する機会が増えていけば、解決も早くする事ができるのではないかと思ひます。最後に、両国の意見をしっかりと聴き合うということですが、確かに北方領土は日本固有の領土であり、ロシアが日本に返還することが一番だと思ひます。しかし現在住んでいるロシア人もいます。仕事の関係で住んでいる人もいて、日本に対して嫌がらせをしている人はいないはずで。だから両国の意見をしっかりと聴き合い、互いにとつてよい解決をしてほしいと思ひます。

このように、北方領土は日本固有の領土で現在はロシアによつて不法占拠されている状況です。僕たち若者がこの問題をしっかりと理解して解決していくべきだと思ひます。今もなお、ふるさとに帰れず悲しい思いをしている人がいます。その人たちのためにも、両国にとつてよい解決をすべきです。ぼくにもできることはたくさんあります。それをしっかりと、一日でも早く解決されるように国民が一つになつて頑張っていきたいです。

佳作

北方領土問題解決に向けて

京丹波町立瑞穂中学校
二年 小原 彩芽

私は、これまで北方領土についてあまり多くは知りませんでした。領土問題についても、ロシアが一方的に悪いと思っていました。

今回、社会科の授業で北方領土について学習する中で、元島民の証言や、ロシア側の主張を知ることができました。そこでは日本人は、昔から北方領土で暮らしていたこと、ロシアとは戦争はしないという条約を結んでいたことが分かりました。しかし、ロシアは、日本の立場とは異なり、北方領土を戦争で得た戦利品と考えていることも分かりました。この点で、ロシアは歴史的・法的に北方領土の領有を主張する日本とは、考える次元が違っていることがわかります。

元島民の証言では、「戦争に負けてアメリカ軍が来ると思っていたら、銃を持ったソ連兵が来た。」とあり、私たちは戦争を経験していないから分からないけれど、私が、黒い船で銃を持った人たちが来るのを見たら、恐怖でびっくりしてしまうだろうなと思いました。また、家中を物色されたり、家を取られたりという証言もあり、そんな経験をする、強い怒りの感情も出てくるのではないかと感じました。

このように、戦争が終わってからソ連が攻めてきたことで、今も北方領土はロシアの実効支配下にあることを知りました。この事実を、北方領土についてよく知らない若い世代にもっと広めていってほしいと思います。け

れど、元島民の年齢も考えると、時間的な猶予がない問題なのだと思います。

では北方領土問題は、どのように解決していけばいいのでしょうか。

北方領土に住んでいた元島民の方たちからすると、日本に返還されることを望んでいるのだろうけど、日本が四島返還を訴え、ロシアが四島の領有を主張している現状から考えると、この北方領土問題を完全に解決することは難しいのではないかと思います。このような現状では、どちらかが譲歩しないといけないけど、今はどちらもできないと思います。なので、北方領土を両国の管理下に置くなどして、両国の国民が住めるようにできないのでしょうか。今、北方領土に住むロシア人も日本語を勉強し、元島民もロシア語を勉強していると聞きます。元島民は、お互いコミュニケーションをとろうとしています。元島民が北方領土を自由に訪問でき、北方領土に住むロシア人と話すことができれば、現状は少しずつ変わっていくと思います。すぐに実現することはできないだろうけど、北方領土の地で両国民が打ち解け、仲良く暮らしていくことは、実現不可能なことではないと、私は感じています。

佳作

北方領土返還のために

与謝野町立加悦中学校
三年 森本 真依

北方領土問題。それは日本が抱えている重要な領土問題の一つであることは私も知っていた。しかし、北方領土は、どこのどんな島なのか、今はどうなっているのかということまでは知らなかったし、正直、関心も無かった。そんな中、私は社会の授業で北方領土についてのDVDを見た。このDVDを見たという経験は、私の北方領土に対する関心を高めてくれた。そして、一つの強い意志が生まれた。それは、「一刻も早く、北方領土の返還を実現させたい。」というものだ。こう考えたのには、DVDをとおして二つの大切なことを知ったからだ。

一つは、歴史的にも、法的にも日本固有の領土だということだ。北方領土の歴史は、江戸時代にその存在が分かったところから始まった。それからは、たくさんの日本人の手によって開拓などが進んでいった。今は、ロシア人が住んでいるが、もつと以前は日本人が住んでいた。また、北方領土をめぐる、日ロで多くの条約が結ばれてきた。しかし、いずれの条約でも、北方領土が外国のものになったことはない。よって、今、北方領土がロシアに占拠されていることは、決して見逃すことはできないことである。

もう一つは、故郷の島を出て行かなければならなくなった日本人がいることだ。北方領土は、ただ寒いだけの島ではない。世界に誇る漁場があったり、たくさんの動物が生息する、自然に恵まれた美しい島なのだ。このよ

うな、素晴らしい故郷を出て行かなければならなかった。あまりにもつらいことである。いきなり、どこかの国の人から「今からここはわれわれの国だから出て行ってもらう。」と日本を占領しにくるところを想像してみよう。私は、さみしく、大きな悲しみを味わうだろう。北方領土を追われた人たちも、同じような感情を抱いたはずだ。だから、早く北方領土を返還してもらい、かつて島民だった人たちを故郷に帰してあげたいのだ。

以上のことを学んだ私だが、領土返還が簡単なことではないことも知っている。私たちのような学生が声を挙げてでも実現することではない。しかし、領土返還の実現において、最も大切なことは、直接、実現させるような大きなことをすることではなく、小さなこと、つまり自分ができることをすることである。例えば、「知る」ということだ。知れば、関心を持つ。関心を持てば、意見も持てる。その意見を、この作文のように形にして表現をすることができる。このような小さなこと、「知る」ということを一人一人がしていけば、やがて大きな影響を与えることができるようになるだろう。そうすることで、領土返還に少しでも近づくことができるのではないだろうか。だから、知ろう、北方領土を。北方領土の返還のために。

人と人、思いと思い

京都府立園部高等学校附属中学校
三年 平井 穂乃香

「北方領土」への私のイメージはただの島だ。ロシアと日本がその四島をめぐって話し合いを進めているのを知っているが、何故それほどその島がほしいのかはわからない。私にとって、北方領土とはそれぐらいのものでしかなかった。

私が北方領土について興味を持った理由は、ある先生の授業からだ。その先生は北方領土へ行った時の写真を示しながら、北方領土について教えてくださった。私はその授業で見た一枚の写真が忘れられない。その写真に写っていたのは、北方領土の町並みや風景だった。遠目で見るとすごく日本に近い風景だが、よく見るとそこにはロシアの国旗が掲げられ、日本にはないカラフルな建物が並んでいた。他にも、ロシア人が楽しそうにしている写真等があった。私はその時、本当にこれが北方領土なのかとすごく不思議に思った。そしてロシア人と日本人の仲が悪いわけではないことを知った。それなら何故北方領土問題が解決されないのか疑問に思った。そこで私はロシア側と日本側、元島民の人々の思いについて調べることにした。

まずはロシア側の思いだ。調べていくとロシアは十年ほど前まで、北方領土の開発に消極的だったというから驚いた。その間、北方領土に住んでいた人たちは「私たちはロシア政府に見捨てられた。今、北方領土を日本に返還することに反対する人はいないだろう。」ともいっ

ていたのだ。だがこの十年ほどで開発が急激に進み、ロシア側の思いは変わった。今、ロシアの人々の五三%が「北方領土は現在も今後もロシアに帰属すべき」と考えているのだ。また北方領土に住むロシア人の平均年齢は三十代で、みんな故郷に誇りをもって生きているのだから無理もない。

その思いとはほぼ正反対と言っているのが、日本の元島民の思いだ。元島民の方々の平均年齢は八〇歳を超え、思いを伝えられる人が少なくなってきた。だがその中でも「ふるさとへ帰りたい」という人は多くいた。二〇一六年一二月にあった日口首脳会談でロシアのプーチン大統領は「最大限自由なアクセスを保障する」と述べているが、その約束もすっかりとは守られていない。元島民の不満はつもるばかりだ。

最後に私たち日本側の思いだ。「日本固有の領土だから」といつている人も多い。しかし、この一言で済まされるものなのだろうか。そしてこの思いと同じぐらい多かったのが「わからない」「知らない」という人だった。この作文を通して、私は北方領土問題についていろいろと考えたが、答えを出すことはできなかった。しかし、少なくとも言えるのは、ロシア側にも日本の元島民の方々にもそれぞれ思いがあるということだ。そんな中で私たちは「わからない」「知らない」と無関心でいいのかとすごく不安になった。国と国との問題であるから自分には関係ないと思うのではなく、お互いの思いがある限り、人と人という思いで向き合う必要があると思う。そのためには自分にも思いがないといけないし、その思いを伝えるには、いろいろなことを知っていないければならない。だから私は今回の学びを忘れずに、自分の北方領土についての思いを明確にするために、たくさんの人と交流し学んでいきたい。

佳作

北方領土について

京都府立福知山高等学校附属中学校

二年 植村 結友

北方領土問題。この問題のことはほとんどの日本人が知っているだろう。そこに何十年もの間帰れない日本人がいる。それは一九四五年からロシアに占領されていることが原因だ。

私は最初、授業でこの問題を勉強した時、別に返してもらわなくてもいいんじゃないの？って思った。なぜなら、もう北方領土にはロシア人が住んでいて、今は最初に住みだしたロシア人の孫の世代がいるほどに時間が経っているから。何十年も経った今、無理に返せと言えらるのだろうか。もともと日本人が住んでいたところを無理やり奪ったのはロシアだ。しかしそこに住んでいるロシア人に罪はあるのだろうか。私はないと思う。ここはロシアだと言われ、ロシアだと思っただけでいい。ここはロシアだから。それに経済水域とかの問題もあるけど、日本は島国だし、少しくらいそれが減っても問題はないのではないかと思っただい。

でも調べてみて、次のことがわかった。まず領土問題で「日本がロシアに譲ってしまった」ということになる。と「日本は領土を奪っても譲ってくれる国」という認識が世界に広がってしまったことだ。その結果、「日本は譲ってくれし、無理やり奪ってしまったおう。」という風に考える国が出てくるかもしれない。こうした問題で弱腰の対応をしてしまうと、今以上に問題が多発し、日本の主権や平和が脅かされることになりかねないのだ。

例えば、もし自分の家の一部屋に知らない人が押しつけてきて、この部屋は自分のものだと言いつつ、勝手にその人は一年間立ち退き要求に応じず、勝手に家具を買ってその部屋に住み着いてしまった。その時

「長い間そこに住んでしまったものは仕方ないし、もう部屋を譲ろうか。」

何としてでも相手を追い出して部屋を取り戻さよう。一度、譲ってしまうと味を占めて、別の部屋も奪えらるろうと思ってしまうのは確実だ。例えば、少しでも隙を見せると日本の領海にガンガン侵入しようとしてくるあの国のように。

これらのことを踏まえて、領土問題というのは簡単に、「はい、どうぞ」と譲れるような問題ではないということとがわかった。他の国から日本は弱腰だと思われると、取り返しのつかないことになるだろうと思っただい。

最後に領土問題は本当に難しい問題で、だから長年ロシアともめているのだが、長くなればなるほど北方領土はロシアの手で発展していき、ロシアのものだと信じ込まれていくと思うので、早く解決させることが大切だと思っただい。それには日本の思い切った決断と行動が必要だ。

第12回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞作文集

平成30年（2018年）2月3日

編集・発行 北方領土返還要求京都府民会議
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府広報課内
京都府北方領土教育者会議
〒629-1116 京都府船井郡京丹波町市場丸ヶ野4
京丹波町立和知中学校内

印刷 株式会社 田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入
石不動之町677-2